

# 薫——因果応報説批判——

榎園 久

## 一 問題の提起

薫が、通常な人間とは異なり、まともでない、あつてはならぬ誕生をした。彼の実の父・柏木は、好青年として、源氏からも早くから厚情を受けていた。その一方、柏木は、こと結婚に関しては、無理な高望みをしている人間であつた。

薫が、この柏木を父として、源氏の正夫人・女三の宮との間の、言うところの不義の子として誕生したことは、全く柏木の一方的な思いの結果であつた。このことにより、薫は注目を引く特異な存在となつた。やがて、薫は、異性を愛する年齢に及んでも、その青春時代にありながら、青年特有のはつらつさに欠け、闇夜の道をもたつき歩むのであつた。

薫のこの生き方に関連して、さまざまのことが論じられるのは、当然のことだ。

最も行われている学説としては、朱雀院の婿選びで、女三の宮の相手として源氏を選ばれた結果、柏木が女三の宮に不貞をはたらき、薫の誕生となるのを、女三の宮の婿である源氏の生涯に因果応報の起因をおく考察である。

この考察は、源氏の青春彷徨の中に「源氏物語」の冒頭からものまぎれのきざしのあつた、冷泉院まで儲けた桐壺帝后・藤壺と源氏との関係に因果をおく説である。

つまり、源氏の正室・女三の宮と柏木とのものまぎれは、源氏の青春時代に行つたことへの仏教的因果応報とする考え方なのである。

果たしてそう理解すべきであろうか。わたくしには、この学説についてなお釈然としないものが、胸の底にたゆたうのである。

以下、このこだわりを解明するために、「源氏物語」の因果応報説の検討の試みをおこないたい。

## 二本 論

柏木と女三の宮とのものまぎれを、かつての源氏と藤壺との密通の因果応報であると最も強く主張するのは、池田龜鑑氏、そして秋山虔氏である。

池田龜鑑氏は、物語の二部の概要を述べたあと、次のように記す。第一部とちがって、ここには病氣や死などの人間苦が、つき

つぎと物語られている。そこに流れているものは孤愁である。とくに注意しなければならないのは、女三の宮と柏木との事件が、源氏と藤壺との秘密に対する宿命の線上に扱われていることで、これは源氏物語全体としても重要な問題です。<sup>(1)</sup>

そして、同氏は

……藤壺の出家は桐壺帝への贖罪のためである。しかし、同じ罪を犯した自分は、何によってあがなえなければよいか——源氏の懊悩は時にはげしい焦虚となり、自棄となり、反撥となつて燃えた。<sup>(2)</sup>

と、説く。

また、秋山虔氏は、

……女三の宮はかねてより宮をあこがれ執心を燃やしていた柏木に迫られ、その結果宮は懐妊し、やがて薫が生まれることになる。源氏は、かつてのわが罪を顧み現世における因果応報を痛覚するが、……<sup>(3)</sup>

と述べている。

そして、秋山虔氏は、「1 六条院の明暗」の項の次にはつきりとして「2 因果応報」との項を設け、

女三の宮は懐妊した。源氏にとっては不審なことだったが、宮の不注意から彼女と柏木との密通を知らされた源氏は大きな衝撃を受けた。彼は怒り、かつ悲しんだ。が、わが青春の日に藤壺と通じた過ちを顧み、また父院の立場に思いいたり、その報いを受けたわが身であることを強いて達観しようとした。<sup>(4)</sup>

と、考えている。

同時に、以上において見て来た解釈と異なる次のような論考のあることもまた事実である。

野村精一氏は、

「源氏物語」五十四帖を貫く主題として、罪の問題を当てる考えは、池田亀鑑氏によつて唱えられてから、有力なものとして学界内外に迎えられたものようである。それは宣長以来のもの、あはれ論を一步進めた卓見であったが、同時にその普及には近代小説の理念ないしは近代的罪悪観にもづくものがあつたのだと言えよう。が、はたして、十世紀をへだてた作品の読み方を、かくも単純に割り切ってしまうことが、許され得るものかどうか……<sup>(5)</sup>

と、問いを提出されている。

玉上琢彌氏は、

佛教が優位にある時は、天台教義の宣傳文學と解釋され、儒者がよめば禮樂を知るべき書を見たり。作者を女性の龜鑑として論じたりした。本居宣長（一七三〇—一八〇一）が、そういうのはとらわれた見方だとし、人間生來の感情にもとづいて見よ、と説いたのは卓見である。<sup>(6)</sup>

と、言う。

そして、今西祐一郎氏は、

源氏も藤壺も「罪」を口にし心に念じはするけれども、それらは二人の密通に直接かわるものではなかつた。……そもそもその「罪」がただちに密通の罪であると考えるのはい

ささか早計ではあるまいか。

はやく野村精一は、左に引用した「罪」の諸用例の検討をふまえて「藤壺」と「つみ」という語の関係は極めて薄いと指摘し、問題の「わが罪のほどおそろしう……」の「罪」についても、

古来源氏の倫理観を示すものとされているが、これも直接密通そのものを罪とするものではなくて、思い悩む事自身について言っているのではないだろうか。(藤壺の「つみ」について)

と述べる。密通そのものを「罪」という語で示そうとしない他の用例との整合性を考慮すれば、いかにも従うべき見解である。

とする。

今井久代氏に次のような論がある。

光源氏の空前絶後の物語を可能にした原動力は、藤壺との恋であり、彼女との間の秘密の子冷泉院の即位であった。しかしながらこの二人の恋と冷泉院の即位は、近親相姦のような根源的な禁忌への違反ではないにしても、父であり夫である桐壺院の愛と信頼に対する裏切りであり、なおかつ皇統を欺く行動であったのも事実である。まさに罪深い行為であるのだが、罪に怖れおののく二人をさほど語ることなしに、物語は進行していく。

ハルオ・シラネ氏は、

宣長は「源氏物語」の注釈に強い影響を及ぼしたが、同時

に「源氏物語」を勧善懲悪を描いた作品あるいは因果応報譚や仏教寓話の一種としてみなすような読み方から後世の読者を自由にした。

と、述べる。「源氏物語」の板機に迫る注目すべき論であろう。「源氏物語」を因果応報譚とする論が、ここでも否定されているのである。

更に、円地文子氏は、須磨の暴風雨に源氏があう条について、作者は「須磨」の巻で、単に流謫の悲劇の主人公に源氏を仕立てただけでなく、この、最愛のヒーローを自然の力を借りて最も惨酷にうちのめすことによつて、より振幅の大きい魅力ある男性に育てて行く努力をしているようである。

と、述べる。明らかに定説とは符合しない。稲賀敬二先生は、柏木・女三宮物語の完成のところで、次のように述べている。

罪をおかしたものは、各々さばかれなくてはならない。紫式部は、第一部で藤壺中宮を出家、光源氏を須磨に退居させることによつて、一応罪の償いを終えたものとした。しかし柏木・女三宮の密通事件で光源氏は一層深い苦痛を味わうことになった。今度の事件の当事者たちをどう罰するか。

円地氏の説との不一致、また二つの密通を直接結びつけないことは、源氏と藤壺との密事を柏木と女三の宮との密通が引きつぐとする、因果応報説の一角のくずれていくことを示しているところである。

ところで、桐壺帝の皇子・源氏がものまぎれをおこした相手

は、藤壺という継母であつた。因果応報というのなら、その因果は、源氏の子・夕霧と紫の上という継母に事件は続いていくのが、筋道であらう。

源氏は、自己の過咎にかんがみて、

「大将に見えたまふな。いはけなき御ありさまなめれば、おのづからとりはづして、見たてまつるやうもありなむ」<sup>(12)</sup>

(若紫上 四一四九頁)

と、女三の宮を戒めている。

そして、夕霧は、思いもかけず、紫の上をかい間みることになつた。野分が例年よりもはげしく、空模様も急変して吹きはじめた。南の御殿でも猛威をふるつた。その様子を紫の上は、端近の所で見てゐる。風の見舞いにきた夕霧は、紫の上を見たのである。

源氏は、明石の姫君の部屋に行つてゐる時、夕霧が参上して、東の渡殿の衝立越しに、妻戸の開いてゐる隙間を何げなくのぞくと、女房が大勢いるのがみえるので、立ちどまつてそとと音も立てずに見ている。隔ての屏風も風がひどく吹いてきたので、片隅にたたみ寄せてあるため、中まではつきりと見通しがきく、その廂の座所にすわつてゐるのが、紫の上だったのである。その姿は、ものに紛るべくもあらず、気高きよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。御簾の吹き上げらるるを、人々押へて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いとみじく見ゆ。

花どもを心苦しがりて、え見棄てて入りたまはず。御前なる人々も、さまざまにものきよげなる姿どもは見わたさるれど、……

とてもこの方から目を移す気にはなれない。

源氏が、自分を遠ざけて近づけようとならないのは、このように見る人が心を奪われずにいられそうもない美しさなので、行き届いた人のこととて、もしやこうしたこともあるうかと懸念してのことだったのか、と思うと、夕霧はそら恐ろしくなつて立ちのこうとする。

ちようどその折、源氏が西の対の姫君の部屋から内の襖を引き開けて戻つてくる。

源氏が「なんともいやな、気ぜわしい風ではないか。格子を下ろしてしまいなさい。男たちも来ているだろうに、これではまる見えではありませんか」と紫の上にいっているのを夕霧がまた近寄つてのぞいてみると、

……もの聞こえて、大臣もほほ笑みて、見たてまつりたまふ。親とおぼえず、若きよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。女もねびととのひ、飽かぬことなき御さまどもなるを身にしむばかりおぼゆれど、……

(野分 三二六六頁)

夕霧は、風がこの渡殿の格子をも吹き開けて、自分の立つてゐる所が、向こうから見通しになるので、恐ろしくなつて立ちのいた。夕霧は、紫の上のほほ全貌をはつきりと見たのである。それは、紫の上の美しさについて、「……来し方あまりにほひ多くあざあ

ざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花のかをりにもよそへられたまひしを……」(御法 四五〇四頁)とのべてあることから、かい間みた当時の夕霧に、大きなインパクトを与えたものと想像される。

はたして夕霧は、かつての源氏のように、継母に慕情を抱くのである。

……人柄のいとまめやかなれば、似げなさを思ひよらねど、さやうならむ人をこそ、同じくは見て明かし暮らさめ、限りあらむ命のほども、いますこしはかならず誕びなむかし、

(野分 四二六九頁)

と、思い続けずにはいられないのであった。

紫の上は、彼女の人生の終わるまで、夕霧にとつて忘れられぬ人となつたのである。しかし、夕霧の行動がそれ以上のことに及ばなかつたことは、良識や自制と言うよりも、奇しき人生を与えられた源氏とは異なり、表現世界に造形された、その人の性格によるものと考えてよいだろう。こうして、夕霧と紫の上には、ものまぎれはおきることにはなかつた。

源氏と藤壺との因は、夕霧と紫の上には、果を残さなかつたのである。このことは、後に述べる柏木と女三の宮との悲劇が、その人間性、すなわち人間の根源、ハルオ・シラネ氏が述べる「この長い物語の第一ページから現れていた主題・すなわち、哀れ、脆さ、弱さ、心もとなさの美学」のみに起因すると言えるだろう。

さて、

いでや、上の品と思ふにだにかたげなる世を、

(帚木 四六一頁)

という源氏のこの言葉は、どのような予想で述べたかとは別に、後の女三の宮・柏木事件の始元を示している言葉である。

朱雀院の帝は、このところ特に体調不順で自己の先行きをさとして、出家の準備をする。

その中でただ一つ心配なことがあつた。幼い女三の宮のことである。

これをおもわくどおり、源氏に預けた。

源氏が女三の宮に興味をおぼえるのは、

「この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにものしたまひけめ、容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれたまひし人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮おしなべての際にはよもおはせじを」(若葉上 四四一頁)

と、心を動かしているらしいからである。源氏の最大の弱点である色好みを突いた、朱雀院の策略は成功し、結婚してくれとは一言もいわず、女三の宮を、預かりの身として、源氏が後見することになった。しかし、一応成功したと考えられる、朱雀院が「片生ひ」の女三の宮を押しつけたことが、後の女三の宮の不幸へとつながることは、まことに皮肉なことであつた。女三の宮を承引した源氏は、ただ幻滅を感じるだけであつた。

女三の宮は、皇女として独身を通すべきであつたのである。女三の宮との結婚は、源氏を、苦勞勞として後には苦惱させ、それまで六条院の中心にあつた紫の上を不幸にした。

更に、柏木を非業の死へと向かわせ、その柏木の子の薫に、人並みな青年としてはほど遠い人生を送らせ、半聖となった薫は、後に宇治の姫達の身を誤らせた。

その一方、柏木は、源氏の女三の宮への扱いがうすいと世間の噂を耳にし、自分だったらこんな思いをさせることはなかったろうにと思い、ただ源氏の出家の折になつたらと思いつめるのであつた。

六条院の蹴鞠の遊びに加わつた折から、柏木は、急速に女三の宮に近づく。

柏木が、幼い頃から、器量秀抜な貴公子であることは、源氏、帝そして世の人も等しく認めるところであつた。この前途有望な青年の将来を根底から壊し、再起おぼつかなくしたきつかけは、蹴鞠の遊びのすぐあとにくる。

思わぬ猫の出現により、柏木は、かねてから思いをよせていた女三の宮らしい人の全貌を見ることになつたのである。蹴鞠が見たくて立ちあがっている女三の宮の不謹慎な振るまいの、その姿を見た柏木は理性を失つた。

ここから、柏木は、あたら若い命を散らす階梯をおりていかねばならなかつた。

更に、女房や女童などが、見物に出ようと用意にかまけているのもとりどりに忙しそうにしていて、宮の御前はひっそりと静かで、また人少なの時分、いつもはそばに付いている接察の君も、局に下がっている間、ただこの小侍従ぐらいが近くに控えている時、好機とみて、小侍従は、柏木の手引きをした。柏木は、大そ

れた過ちをしてしまつたと考え、源氏ににらまれ疎んじられることが恐ろしく面目なく思う。そこには、平常心を失つた柏木の姿がある。

まもなく密通は、源氏の知る所となる。苦惱する源氏は、故院も、自分の密事を知つて知らぬふりをしていただろうかと考える。しかし、この考えは源氏の独り決めである。

故院は、源氏を「まめ男」と思つていたのであり、冷泉院誕生の際、

(帝八)「皇子たちあまたあれど、そこをのみなむかかるとより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、みなかくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。

(紅葉賀 〇三二九頁)  
と、あることから、故院は、源氏と藤壺とのものまぎれには、氣付いていなかったとみるべきである。

そして、源氏は、柏木の恋ゆえに生じた、柏木と女三の宮との密通事件を、「恋の山路」を非難できないと考える。

やがて、女三の宮は、男子を出産する。源氏は、さてもあやしや、わが世とともに恐ろしと思ひし事の報いなり、この世にて、かく思ひかけぬことにむかはりぬれば、後の世の罪もすこし軽みなんや、 (柏木 四二九九頁) と思う。

今、見て来た所の解釈として、この柏木と女三の宮との密事を、

かつての源氏自身のしたことの因果応報として片づけるのには、先の諸氏の見解に見てきたように問題が多い。

夕霧と紫の上との関係は、実事にまで及ばなかった。前にも述べたように、桐壺帝が、源氏と藤壺との密通を知っていることは、どこにも書いてはないのである。

そもそも藤壺と源氏との密事と、女三の宮と柏木との情事は源氏という人間の造型、奇しき人生の特徴からいっても、この二つのケースを等し並みに、同次元で捉えるべきではあるまい。先ほどから述べてきた因果応報のよりどころとなつてゐる「報いなめり」は、源氏自身の内部の推量する独り決めである。

これらのことから、この因果応報説は、見直すべきであると、わたくしは考えるのである。この二つのケースを同次元で捉えることは危険である。

女三の宮の属する、上流階級においても、理想的な女はめつたにいなかったのである。

従つて、ここに見た二つのケースは、因果応報の理と見るよりも、人間の本性により、思いもよらぬ結果をもたらしたと、考えられるのである。

藤井貞和氏は、

……光源氏としては、それまでに何人もの正妻らしき女性を手に入れておりますけれど、最終目標はやはり皇女だと考えています。最終目標が皇女だというのが、こういう物語の限界だといわれれば限界なのですが、女三の宮という皇女を正妻として迎えるというのが、物語のある頂点をなす事件

というものです。<sup>(14)</sup>

と述べる。源氏も、柏木も皇女を正妻にねらつた。しかし、この物語の場合、源氏の正夫人・女三の宮の社会的未熟さが、皇女を迎え幸福の頂点にある源氏に、思わぬ苦渋をもたらすことになつた。朱雀院皇女、女三の宮は、上流どころにありながら、理想的な女性ではなかつたのである。

『源氏物語』は、何という恐ろしい世界であるのだろうか。

女三の宮は、藤壺にも紫の上にも及ばぬ資質の女であつた。女三の宮は、「片生ひ」であつたのである。

『源氏物語』は、稚拙な女を登場させたにとどまらず、より深い人間模様を示すのである。

皇女・女三の宮をめつた源氏は、かねてから私的情をかけている柏木というはるかに源氏よりも格下である、また、彼も、皇女との結婚を願望している青年に、女三の宮と密通される羽目になつたのである。このことは、人間の中心にある本来的魔性のそら恐ろしさを思わせる。源氏にとつて、これ以上のぶざまな結末を語つてゐることはない。

『源氏物語』は、人間存在の本質を描いているのだ。

右のことは、『源氏物語』の表現世界全体が、源氏と藤壺、そして柏木と女三の宮に、罪と因果応報の理を負わせるとする主張に、再考を迫るものであらう。

『源氏物語』は、人間の本性にもとづく、はるかにスケールの大きい作品であることを認識させる。この物語は、人智を越える文学作品であつた。ここに、『源氏物語』の作品世界の特徴が認

められる。

源氏と藤壺とは、またそれなりの苦勞がある。柏木もまた自分の理想をかけて必死に生きたのである。

しいて言えば、この所には、哲学の「因果律」を考えてもよかるう。そして、柏木と女三の宮との密通という果は、その因を、人間の中に、人間の根源的内部に求めようとする解である。

これによって、「源氏物語」の文学作品としての特徴は的確にとらえられるのである。

円地文字氏は、

……こと「源氏物語」に関しては、必ずしも手弱女振の文学ではないと私は思うのです。ヒューメンな、人間というものの土台に立った文学であつて、単に「女」に寄せつけて考えなければならぬ文学だとは思わないのです。女の手になつた文学であることは承認していいのですけれども、作品の手応えとしては、立派に「人間」を描いた劇である、というふうに考えております。

と、述べる。これは、「源氏物語」の本質に適切にせまつた解であると考えられる。

因果応報とは、何であるか。

これに関連して、「因果応報」については、次のような、注目すべき説がある。

善いことをすると善い結果があり、悪いことをすると悪い結果があるという。仏教は因果応報を説く宗教だと思つている人が世界にゴマンといる。これはちゃんと仏教を聞いていな

い人がいっぱいいるということだ。

因果応報というのは仏教の墮落した教説なのである。それは結局、欲望の満足を仏教の目的だと思つていふことから出たものだ。<sup>16)</sup>

そして、ハルオ・シラネ氏も次の様に述べる。

『源氏物語』の物語の核心は、道徳や宗教上の教訓にはなく、心理的、情緒的なドラマにあるのである。

### 三 結 語

以上述べてきたように、「源氏物語」は、因果応報を語る作品ではなく、人間の中核にもとづく、必死に生きつつも、思いのままにはならぬ人間の本性を追求する、人間の魔性を根元にした文学形象である。

そういう意味からも、因果応報説にまどわされることは、さげねばならないと思うのである。

わたくしは、「源氏物語」において、浮舟の俗と超越の生きざまとともに、あるいはそれ以上に、源氏が奇しき人生を送り、その源氏が、柏木と女三の宮との間の子を抱き、感慨にひたり、やがては柏木を哀惜する姿に、そして病床の柏木を見舞う夕霧の友情に、文学的興味を深く覚える。そこにあるのは、かつての、明石女御の生んだ若宮を抱く、榮光に輝く源氏の幸いとはほど遠い苦惱であり、形見の子のいることさえ知るよしもない、悲嘆にくれる両親を後にした、囑望された人生半ばに倒れた柏木の非業と



不孝の人間ドラマである。それは、おぞましい人間存在の苦悶の姿である。

『源氏物語』は、人間を描いた本格的文学形象であった。『源氏物語』の研究が、因果応報説を超越して、新しい段階へ進む日は、もうそこまできていることを知る。

## 注

- (1) 池田龜鑑『源氏物語入門』(昭三五・七) 六五頁。
- (2) 池田龜鑑『源氏物語入門』(昭三五・七) 四七―四八頁。
- (3) 秋山 虔『源氏物語の世界』『日本文学新史(古代Ⅱ)』鈴木一雄編(平二・六) 一九〇頁。
- (4) 秋山 虔 日本を創った人びと5『紫式部』(一九七九・九) 五六頁。
- (5) 野村精一『日本文学研究大成 源氏物語1』(昭六三・四) 一三八頁。
- (6) 玉上琢彌『源氏物語』(昭三五・十) 八頁。
- (7) 今西祐一郎『源氏物語覚書』(一九九八・七) 八頁。
- (8) 今井久代『「東宮の御ため」の論理―藤壺の運命と桐壺帝―』『國語と國文學』(平十・二) 一五頁。
- (9) ハルオ・シラネ『夢の浮橋』(一九九二・二) 二五五頁。
- (10) 円地文子『源氏物語私見』(昭五二・一) 四五頁。
- (11) 稻賀敬二 日本の作家12『源氏の作者紫式部』(一九九四・一〇) 一六二頁。

(12) 『源氏物語』本文の引用は、小学館新編日本古典文学全集による。

- (13) ハルオ・シラネ『夢の浮橋』(一九九二・二) 二九一頁。
- (14) 藤井貞和『源氏物語』1 松井健児編(一九九八・二) 一三頁。
- (15) 円地文子『源氏物語私見』(昭五二・一) 一九七頁。
- (16) 歎異抄を読む 七章 魔界外道  
<http://www.honshoji.or.jp/bud/bud0024.htm>
- (17) ハルオ・シラネ『夢の浮橋』(一九九二・二) 二五五頁。  
(前神戸市立神戸工業高等学校)